

OPINION WEST

# 風の座標

## 近代美術館整備



文化・生活部次長  
西井 淳

豪華で幾分奇妙な展覧会が開催中だ。ポッチョーニ、マグリット、ダリ、佐伯祐三、岸田劉生……。近代の名画、という以外くりよりのない12の作品が、大阪歴史博物館の、200平方メートルほどの一室に、仲良く掲げられている。観光のついでに立ち寄る外国人客は、評価総額が100億円に上る作品群を前に、「本物なのか」「なぜ、ここに」と質問するという。

近代美術館整備のために、大阪市が購入したり寄付を受けたりした収集品の一部だ。1983年、大阪・中之島の建設構想を発表し、98年には基本計画ができたが、資金難で凍結した。約4400点、評価総額256億円余りの美術品が、普段は倉庫で眠り続けている。今年1月、有識者による検討委員会が市に推進を提言して、再開が決まった。ただ、市の動きは緩慢だ。建設には100億円余りを見込むが、財政は厳しく、本格的な事業化に及び腰なのだろう。「気軽に集め、憩える美術

# 美の都市デザインが必要だ

空間を」「館を核に中之島の学びの場に」「市民・NPO主体の運営体制を」など提言に盛り込まれたイメージを、どう具体化していくのか。市への無償譲渡が決まった大阪・サントリーミュージアム天保山とのすみ分けも含めて、都市デザインの俯瞰図が示されてこそ、建設に広く理解が得られるのではないのか。全国の美術館数はこの20年で2倍に増え、約450館(2008年度)に上る。1館あたりの入館者数は約9万人(89年度)から約5万人(07年度)に減った。個性を打ち出せずに集客に苦戦したり、税収の低迷で、予算や人員の削減を強いられたりする公立美術館が少なくない。

だが、内外の事情に詳しい慶応大大学院の岩淵潤子教授は、恐慌の最中にできた大原美術館や、日米開戦の年に開館した米・ナショナルギャラリーが、誰もが価値を認める存在になった例を挙げ、「美術館設立は景気に左右されるべきでない。美術品は公共財で市は市民から預託されているに過ぎない。死蔵は極めて不適切な状況」とする。成功例はある。04年の開館から2年間で300万人を集めた金沢21世紀美術館(金沢



未来派を代表するポッチョーニの「街路の力」。昨年はローマやロンドンの美術館にも貸し出された

市)は、市内全小中学生の送迎バス付き無料招待など、型破りのアイデアで街の空気を変え、美術にあまり関心がなかった人たちがファンになった。館長を3年間務めた養豊さんは「強い意志を持った旗振り役が不可欠だ」と語る。提言後、市民向けに初めて開かれた建設計画説明の場で芸術家の森村泰昌さんが「人材を集めて斬新なアイデアが提示できる少人数のチーム、美の精鋭部隊を作ることが必要」と訴えた。確かに、現状では「俯瞰図」のデッサンさえも容易に描けないだろう。「今から、これだけの作品を集めるのは不可能」(サザビー・ジャパン・石坂泰章社長)と評価される貴重な芸術財産を生かすために、知恵の結集が急務だ。